

金山明の赤い円の絵画について

北川智昭

抽象絵画の発展は合理的なもの、非合理的なもの、冷静、激情、即興と、熟慮と、いずれかの一面に偏して、活動が行なわれて来たようである。しかし真の美術は、一面だけのものではなく、人間の全面的な所産であるべきであり、単に技術によってのみ形造られるものではない。深く繊細な内面の体験によってのみ完成されるべきものなのだ。(中略) ——芸術は眼に見えないものを、見えるようにすることだ—— 西欧モダンアートの始祖パウル・クレーは、いみじくもこう言っている。¹ 金山明

はじめに

金山明^{かなやまあきら}は、戦後の重要な前衛グループ、具体美術協会(略称:具体)のメンバーとして活動した作家である。冒頭に略歴を辿ると、金山は1924年兵庫県尼崎市に生まれ、多摩帝国美術学校(現・多摩美術大学)で絵画を学んだ。1950年、26歳の時に大阪市立美術館付設美術研究所に入所し、ここで後に妻となる田中敦子と出会う。同年、新制作協会展に出品。1952年、28歳の時に白髪一雄、村上三郎ら、新制作派協会で抽象画を描いていた若手作家とグループを結成。「あらゆる芸術は無から始まる」との考えから〇会と名づけられたグループの中で先鋭的な絵画表現を推し進めた。

芦屋市在住の画家、吉原治良が中心となり設立された「具体」には、協会設立の翌年にあたる1955年、31歳の年に〇会を解散して白髪一雄、村上三郎、田中敦子らと参加。10年後の1965年に41歳で田中敦子とともに退会するまで、吉原治良を補佐しながら活動を続けた。

「具体」退会後の金山は、長い発表活動休止期間に入る。大阪のギャラリーで初の個展を開催し、活動を再開するのは退会から27年後の1992年、68歳の年であった²。以降、2006年に82歳で亡くなるまで、金山は名古屋のギャラリーで個展を重ねるなど、精力的に活動している³。

金山の生涯の活動は、以上のように〇会時代、「具体」時代、「具体」以後、の3つの時代に区分される。本稿では、「具体」以後の発表休止時期にあたる1976年、52歳の時に制作された絵画《無題》(図1)を取り上げ、その寡黙な表現について考察を試みる。

《無題》は、金山の歿後、奈良県明日香村にあった彼の自宅兼アトリエの倉庫で見つかった。正方形のカンヴァスに赤い円をただ一つ描いたこのシンプルな抽象画は、白黒の図版では丸い形が不明瞭にしか映らない。円に塗られた赤と、背景の青い絵具の明暗が近似しているためである。それゆえ、《無題》は明暗に依らない純粋な色彩の対比を体験させるが、金山はこの視覚効果を意図していたと思われる。本論では、彼がなぜこのような表現を採ったのかについて考えを進めながら、金山独自の絵画観を明らかにしていきたい。次に、金山の初期から《無題》までの表現を改めて概観してみる。

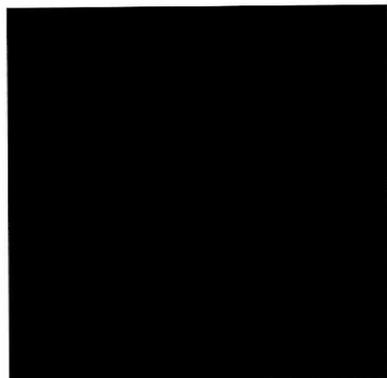


図1 金山明《無題》1976年
油彩、カンヴァス 140.0x140.0cm
個人蔵

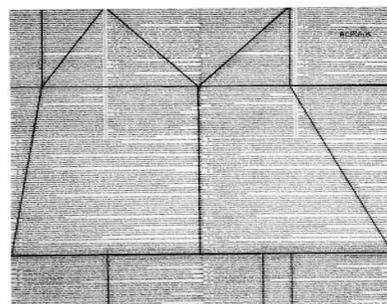


図2 金山明《Work-E11》1951年
コンテ、B/L紙 30.5x37.5cm
芦屋市立美術博物館蔵

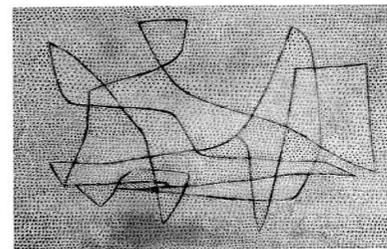


図3 パウル・クレー《島》1932年
油彩、砂を混ぜた石膏・板 55.2x85.2cm
ブリタニオン美術館蔵

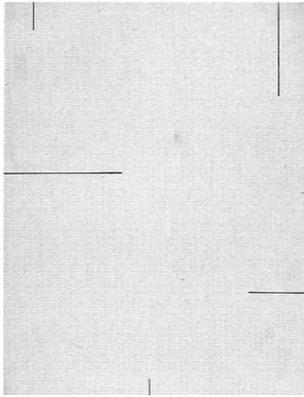


図4 金山明《Work》1952-54年
水彩、紙 26.5×20.2cm
個人蔵

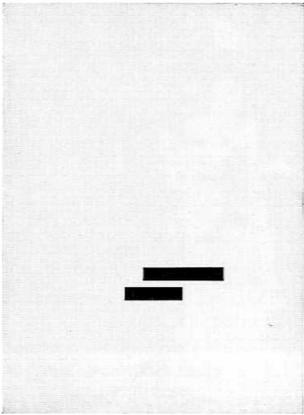


図5 金山明《Work》1954年頃
油彩、カンヴァス 33.5×24.0cm
千葉市美術館蔵

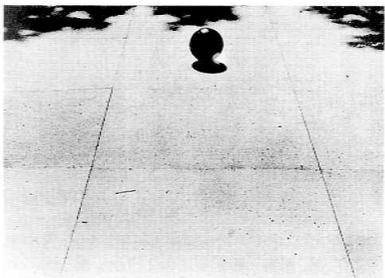


図6 金山明《作品B》1955年
塗料、ゴムボール、板
700.0×700.0cm(板)、φ30.0cm(ボール)

ゼロ 0会時代から《無題》まで

初期のゼロ会時代、金山は形や線といった造形要素を極限まで切り詰める絵画表現を推し進めた。「船荷証券を支持体にした」⁴《Work-E11》(図2)はその一例だが、ここで指摘しておきたいのはパウル・クレーの影響である(図3)。

次いで彼は、1952年から54年に掛けて、10数点程度のドローイングを集中的に制作する(図4)。いずれも画面中央には何も描かれておらず、画用紙の四辺から数本の直線を引いただけの作品である。金山はこれらのドローイングを制作するにあたり、画用紙の大きさを計り、紙の縦横の比、紙の中心線、対角線の位置などから長さや位置を決定して、直線を描いたと思われる。そして、造形表現の基本ともいべき線から、意味や修辞、恣意性や感覚的要素を削ぎ落としていくこれらドローイングの作業などを経て、彼はゼロ会時代の最後に、正と負の極のような赤と青の直線だけを画面に残して描いた作品を発表するのである(図5)。

そして翌1955年、金山は絵画の要素を突き詰めて考えた末に、何も描かれていない真っ白なカンヴァスを展覧会の出品作として吉原治良に提案し、出品を拒否される。金山の竹馬の友である白髪一雄は、そのときのエピソードを次のように述べている。

私の子供のころからの画友の金山明は、モンドリアンの純粹抽象の作品をもっと単純化したような絵を描いていた。それを突き進めて線と色面の構成をぎりぎりまで省略していったら、ついにカンバスの縦と横の比率だけが残ることになった。そこで何も描いていないカンバスでも立派な作品であると、大まじめでこれを展覧会に出品しようとした。⁵

金山は、この「何も描いていないカンバス」を最後に、「具体」のメンバーとしてひとまず絵画制作を離れ、屋外や室内の空間に立体を仮設する作品へと移行する。その最初のモチーフが赤い玉であった。

1955年7月に芦屋川畔芦屋公園で行われた「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」に、金山は7m四方の白い板の中央に直径30cmの赤い球を置いた《作品B》(図6)を出品。次いで同年10月に東京の小原会館で開催された「第1回具体美術展」では、天井から赤い電球を吊るす《たま》や、白いバルーンの《作品》(図7)などを展示した。白髪はこのときの様子を次のように解説している。

ロビーから二階ホールへ入った観客は、今までどんな展覧会にも出品されたことのないものをそこに発見する。部屋の中央の天井からつり下げられたまっ白な巨大な球体、それは床までとどきそうで部屋の中央の空間を占めている。出品者金山明は部屋全体を長方形とみて、その中央に大きな球体を存在させたかっ

